

東洋の思想と宗教 第四十號 令和五年（二〇二三） 三月 抜刷

『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』
——平安後期『法華經』讀誦法の一側面——

崔 鵬 偉

『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』

——平安後期『法華經』讀誦法の一側面——

崔 鵬 偉

一、はじめに

『心性罪福因緣集』は永明延壽（九〇四～九七五）に假託され、平安後期頃、日本で成立した佛教説話集である。^①永觀『往生拾因』第九因のほか、『今昔物語集』天竺部に引用されていることから、平安後期の淨土思想や説話文學の研究において注目されてきた。^②しかしその思想内容については、未解明なところが少なくない。

卷中第十三話（以下本話と略す）は、明智和尚（傳未詳）がとある比丘に對して、希有難遇の大乗經典を讀誦する際の心行作法を説くものである。そして源信假託の『法華經讀誦觀』^③は、本話と内容的にかなり近い關係にある。

『法華經讀誦觀』のテキストは、天台僧舜興（一五九二～一六六二）による寛永二十一年（一六四四）の寫本のみが西教寺（正教藏 雜々二）に現存し、それを底本として、『大日本佛教全書』第三十一・『惠心僧都全集』第三卷に翻刻が收められている。^④しかも當該寫本は單獨ではなく、『生死覺要鈔』『本覺心要和讃』『觀心往生論』『自行略記』など八つの文獻と合わせて一卷に合冊され、『菩提鈔』という書名で傳わっている。

管見の限り、本話についての先行研究はなく、『法華經讀誦觀』に關する解説は、『佛書解説大辭典』『大日本佛教全書』の解題しかない。そこで小稿では、まず本話の内容を概観し、ついで兩者の本文比較を行うことによって、これらの

異同を指摘しつつ、その影響関係を明らかにしたい。また、本話が大乗經典全般の讀誦を説くのに對して、『法華經讀誦觀』は『法華經』の讀誦に特化した記述をする。では、なぜこのような相違が生じたのであろうか。手がかりとして、類似した内容を持つ、傳覺鑒『孝養集』卷中第十二「可讀法華經事」を取り上げて考察を行う。これによって、平安後期『法華經』讀誦信仰の一端を浮かび上がらせた。

二、『心性罪福因緣集』卷中第十三話に説く 經典讀誦

本話には題名が付されていない。内容は、本稿末尾に掲載した對比表（兩者の相違點をゴシック體で示した。傍線等の記號はすべて私に付した。以下同じ）に示したように、次の四つの部分からなる。

①明智和尚は比丘と會話し、その日常の行法を聞く。比丘は經卷數百卷を讀誦していると答える。和尚は讀誦する際の心行作法を聞くと、比丘は他の法師に見習つて經典を讀誦するがその因縁を尋ねることはなかったという。和尚は嘆き、かつて自分をはじめて菩提心をおこした時、胡國の北山において、とある比丘から讀經の作法や

『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』（崔）

因縁を教わつたと語りだす。大乘經典の讀誦には、文字誦と理觀誦の二種があるという。

②文字誦を詳しく説明する。誦經する前に、身業・口業を淨めなければならぬ。大乘經典は三世諸佛の父母で、諸佛が師とするところであるからである。大乘經典に對しては、希有の思いを抱き、戀慕の心を生じ、三業の罪を懺悔し、誓願を立てて力の堪えるところに隨つて供養する。その上で、經典の文句を思惟し、一字一句を讀み落とさないように、信心をもつて讀誦することを事讀誦という。

③理觀誦を詳しく説明する。觀心讀誦ともいう。經卷が我が心にあり、我が身體が經典そのものであると觀察する。骨髓は軸、皮肉は紙、血色は墨のようであり、五臟六腑などが重なりあつても交わらないことは、經典の文字が互いに交え亂れることはないことと同じである。このように思惟することを眞讀誦という。また我身・經典が空であると觀ずることを空觀誦といい、空であるけど有でもあると觀ずることを有觀誦という。さらに我身および一切法が非有非無・亦有亦無にして、識の知るところではなく、言葉で言い表すこともできず、無始法爾・

寂靜宛然なることを觀するのを觀心中道讀經という。このような觀察を理觀誦という。

④文字誦だけであっても功德は無量であり、觀心讀誦の功德は言うまでもない。觀心讀誦の行者を供養禮拜讚嘆すべきである。觀心によらず、如法に讀誦しなければ、大きな利益が得られない。これは密事であり、不適當な人に傳えてはいけない。

登場人物が會話を交わしつつ、かつての體驗談を語りながら教理を説き、最後に「是故應^レ知、心・佛・衆生三無^二差別^一。應^レ觀、法性眞如寂靜、諸法心起不思議故」という定型句で締めくくる。このような説話構成は、『心性罪福因緣集』におけるほかの話と類似する。

以下、第三節から第六節にかけて、四つの方面から、本話と『法華經讀誦觀』の異同について考察する。

三、説話的記述

對比表①④において、本話の説話的記述（明智和尚と比丘との會話）が、『法華經讀誦觀』では削られている。しかし、『法華經讀誦觀』の冒頭が唐突に「汝今讀誦」「我爲汝」ではじまり、會話しているような記し方となつているところか

ら、もともと説話的な記述があつたことが推察できる。

①に登場する胡國の北山に止住する比丘の讀經作法（對比表AとB）は、『觀普賢菩薩行法經』に説く見佛のために行う懺悔の行法（傍線部）や、『續高僧傳』卷二十八讀誦篇「唐益州福成寺釋道積傳七」などにみられる、高僧たちが身體の穢れを洗淨し、法衣・法座を淨めてから經卷を開くというやり方と近似する（傍線部）。

若欲^二疾成^一阿耨多羅三藐三菩提^一者、若欲^二現身見^一十方佛及普賢菩薩^一、當^二淨澡浴、著^二淨潔衣^一、燒^二衆名香^一、在^二空閑處^一、應^下當誦^二讀大乘經典^一、思^中大乘義^上。

（『觀普賢菩薩行法經』「大正九・三九三中」）
釋道積、蜀人。住^二益州福成寺^一。誦^二通涅槃^一、生常恆業。凡有^二宣述^一、必洗^二滌身穢^一、淨衣法座、然後開^レ之。
（『續高僧傳』「大正五〇・六八七下」）

ここで注目したいのは、『止觀輔行傳弘決』卷二之三所收の、『法華經』普門品を讀誦する岐州の沙彌の話である。揚州（現在の中國江蘇省揚州市江都區）の僧と、岐州（現在の中國陝西省鳳翔・周至・麟遊・隴・寶鶏・太白等の市・縣を含む地域）の沙彌が同時に閻魔王にまみえる。閻魔王が『涅槃經』を誦通する僧を銀座へ、『觀音經』しか讀誦しない沙彌を金座へ

坐らせ、後者をより敬重した。二人とも壽命が残っていたためこの世に返ることができた。閻魔王の處遇の差を恨んだ僧は、沙彌のところに赴き理由を問うが、誦經する際の心構えや作法（普段とは別の衣を着て別の場所、焼香し呪願して、その後によりやく誦經する）に差があることに氣づく。讀誦に際してきちんと威儀を整え、身業と口業を淨めなければ、ただ經文を忘れないようにしているだけなのであるという。

今且下、正出別相。其流非一、且寄誦經。既非五收、驗知有別。而非下、斥事也。三昧是定。定・慧二法導一切法、乃至成於波羅蜜等。若如大師誦經觀法、則事理具足。

如開皇初、有揚州僧、誦通涅槃、自矜其業。復有岐州東山下林寺沙彌、唯誦觀音一品。二俱卒死、同見閻羅。閻羅乃處沙彌於金座、甚敬重之。誦涅槃僧令處銀座、敬心不重。事訖問云、俱有餘壽、二皆放還。誦涅槃僧心大恨恨。持所誦多。於是乃問沙彌住處。各辭俱醒。誦涅槃僧至岐州一訪、果得沙彌、具問所以。沙彌言、初誦觀音、別衣別座、燒香發願、然後乃誦。斯法不忘、更無餘術。涅槃僧謝曰、吾罪深矣。所誦涅槃、威儀不整、

『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』（崔）

身口不淨、救忘而已。故古人言、多惡不如少善。於今取驗。此亦精進、非波羅蜜。

〔止觀輔行傳弘決〕〔大正四六・二〇二上〕

沙彌の作法（傍線部）は、前掲『觀普賢菩薩行法經』〔續高僧傳〕の記述に類似するが、これを湛然が「大師誦經觀法、則事理具足」（波線部）の例證として捉えていることが重要である。大師の誦經觀法が具體的に何を指すかは定かではないものの、事と理に分けて讀經の觀法を議論する本話と『法華經讀誦觀』の主題に符合するからである。具體的な事例をもつて事理具足の『法華經』讀誦を説くものとして、『止觀輔行傳弘決』は早い事例であろう。

さらに、①にみられる讀經作法は、傳覺鑒『孝養集』卷中第十二「可讀法華經事」にも確認できるが、内容的に②④とも重なるため、次節で詳しく検討したい。

四、傳覺鑒『孝養集』との對應關係

②において、本話と『法華經讀誦觀』との大きな相違は一箇所のみである。『法華經讀誦觀』の最後の一文、「破一念無明、出三十界三千諸法實相理、云事也」は本話にみられない。「一念」「三千」は『摩訶止觀』に由來する。無明を

破して諸法實相の理を顯出するというのは、『法華文句』卷四上に「開者即是十住、初破^一、無明^二、開^三如來藏^四、見^五實相^六」(大正三四・五二中)と、「開佛知見」を解釋する記述に基づく。つまりこの一文は、『法華經』の注釋書をふまえて構成されており、それは『法華經』と關連付けるためであらう。

ここで注目したいのは、本話と『法華經讀誦觀』と『孝養集』卷中第十二「可讀法華經事」との内容における對應關係である。『孝養集』三卷は、覺鑠(一〇九五―一四三三)の著作と傳えるが、僞撰とされる。永觀(一〇三三―一一二二)『往生拾因』の引用がみえるほか、良忠(一一九九―一二八七)『看病用心鈔』と共通した内容を持っており、平安後期から鎌倉期にかけての撰述と考えられている^①。やや長文ではあるが、『孝養集』の該當箇所を以下に引用する。

如何成所にて如何成作法にて讀奉るべきと云ば、法師品に曰、

寂莫無人聲、讀誦此經典。我爾時爲現、清淨光明身。^文

法師品と安樂行品と此二品に廣く説が如し。但し具に左様に有ん事は難し。只其趣に付て申さば、先彼時の作法

には沐浴精進して、手を洗ひ口を能能すすぎて、淨衣を著し、新しき座をしきまふけて、御經の御前に、香華を備へ、次に五體を地になげて恭敬禮拜しつつ口に唱へ、心に思ふべし。我阿僧祇劫を過しか共、三寶の御名を聞く事なかりき。如何に況んや、佛まれに世に出給ひて説給へる大乘至極の經に遇奉り、讀奉る事は、一眼の龜の浮木のあなに遇、優曇華の三千年に一度さけるよりましなりと思へ。小々の縁に非ず。是實に有がたき緣難^②計悦び也。此經讀奉る所には、必諸佛菩薩天龍八部等^③みちみち給ふと思て、國王などに向奉る様に思ひなして、彼法座の上に居て名香を手にぬり、御經を取奉ていと高からず、卑からずよき程に心得て讀奉るべし。又讀はてて高座より下ん時、又初の様に禮拜すべし。さて淨衣を脱、常の垢衣を著して、常の有様になるべき也、とぞ申したる。

(中略)

さて法華經と申すは一切衆生の心性眞如實相の理、此を妙法と申す也。此故にかかる生死不淨の所なれ共、能修行する人は彼妙法の種を具したるが故に、菩提を顯し得る事、譬へば彼蓮華の種子有に依て、泥の中より出

て、花さき實なるが如くに侍へるとて妙法蓮華とは申なり。

されば此經は我身の中に皆備はり給へる萬德圓滿の、無量劫にも顯れ不_レ給つるに、三因佛性の今既に新に顯れ給へるなり。又是に過て一定佛に成安き事や侍へらん。深く尋給ふべし。其事常にも人の申さぬ事也。

略して申さば、此經を讀奉る時心を一にして觀ずべし。我經を讀奉る舌の上に八葉の蓮華あり。其上に金色の佛います。其佛の口より六萬九千餘の文字一一に金色の佛にて出、虚空に登りて光を放つて持經者を照し給ふと云り。是故に彼法界に充滿し給へる若干の佛、各六道四生の一切衆生を利益し給ひて、諸佛の知見に入て三界を出さしめ給へと觀念して讀奉るべきなり。

其功德は唯佛與佛のみ知奉り給へり。佛より外に知人あるべからずとぞ仰せられたるなり。實に志しあらん人は其を尋て知給ふべきなり。但しかかる甚深最極の大乗經にておはします故に、愚にすれば、又深き罪と成なり。この故に能能用意して讀奉るべきなり。此は是諸の國王大臣の御師なり。又三世の諸佛菩薩にも御師なり。又法身如來の全身の舍利なり。此故に經卷のをはします

『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』（崔）

所には諸佛菩薩あつまり、諸天龍神圍繞し守り奉り給ふなり。かかる目出度御經を懈怠不淨にして、或は酒を飲、肉食をし、或は五辛を食する口にて讀奉る事、ゆゆしき恐の中の恐なり。（『孝養集』『續淨全一五・四五・四八』）中略までの部分は、『法華經』法師品の偈文を敷衍して説いた讀誦の作法にあたる。中略部分は、『法華驗記』卷上第十一話「吉野奥山持經者法師」（今昔物語集）卷十三第一話「修行僧義春、值大峰持經仙語」に書承）からの取意引用である。中略以降は、『法華經』を讀誦する際の心の持ち方を説く。本話や『法華經讀誦觀』と記述の順序が前後するが、傍線部（ア）（イ）（ウ）（エ）（カ）（キ）は、『孝養集』が兩者（對比表A・F、H）と内容が重なる箇所である。その對應關係を示せば、次のようになる。

（ア） 11 A・D （イ） 11 E （ウ） 11 F

（エ） 11 B （カ） 11 H （キ） 11 C

（ア）では、讀經する際にまず沐浴精進し、手を洗いを漱ぎ、淨らかな衣と新しい座を用意して、經卷の前に香・華を備え、五體投地して禮拜しながら口に唱え、心に思うべきと説く。A・Dの趣向とは一致するが、手・口の淨め方においては、Dの記載がより詳細で、手に名香を塗り口に沈檀香

を含むとする。

(イ) では、佛が世間に出現して説かれた大乘經典に値遇し、それを讀誦することができたのは、海に住む盲目の龜が百年に一度浮かび上がって浮木の穴から頭を出すような珍しいものであると説く。その後、三千年に一度花咲く優曇鉢羅華の喩えが續く。この二つの喩えは、直接に『法華經』妙莊嚴王本事品の經文、「佛難^レ得^レ値^レ。如^二優曇鉢羅華^一、又如^二一眼之龜值^二浮木孔^一。而我等宿福深厚、生值^二佛法^一。是故父母當^下聽^二我等^一令^レ得^二出家^一」(「大正九・六〇中」)に據る。Eには優曇鉢羅華の喩えがみられない。

(ウ) では、『法華經』を讀誦する場所には諸佛・菩薩・天龍八部等が満ちると思惟すると説く。Fでは『法華經』のみならず、大乘經典全般をいう。

(エ) では、讀誦する際は、法座に上り手に名香を塗ってから經卷を取り、高くも低くもないちょうどいい所まで持ち上げて讀むべきで、讀みおわると、高座から降りて最初と同じように禮拜し、淨衣を脱ぎがれた衣に戻ると説く。Bでは、經卷の持ち方に關する記述はなく、讀誦する聲を高くせず、またはやく讀んではいけないとする。

(カ) では、『法華經』讀誦の功德はただ佛のみが知ること

ができる^二と説く。Hでは觀心相應讀誦の功德とする。

(キ) では、『法華經』が三世諸佛・菩薩の師であり、法身如來の全身の舍利であるため、經卷が安置されたところに諸佛・菩薩・諸天・龍神が集まり圍繞して守護すると説く。Cでは大乘經典全般をいう。

以上みてきたように、細部に異同が存するものの、『孝養集』と本話や『法華經讀誦觀』との間に影響關係は認められよう。

一方、波線部(オ)では、『法華經』を讀誦する舌の上に八葉蓮華があつて、その上に金色の佛がいて、佛の口から六萬九千あまりの文字が一個一個金色の佛となつて出てきて、虛空に上つて光を放ちながら持經者を照らすため、法界に充滿した佛たちが、各々六道四生の衆生を利益し、諸佛の知見に入らせるのを觀念すべきと説く。これは本話や『法華經讀誦觀』ではなく、傳最澄『五部血脈』^③「理觀讀誦」の冒頭(傍線部)に基いていると考えられる。

舌上有^二阿字^一。阿字變^二成金色佛^一、從^二我口^一出。經中

一一文字、成^二金色佛^一、周^二遍法界^一、等同^二之虛空^一。

若干一一佛、各出^二隨類法音^一、化^二六道四生^一、令^四開^三

示悟^二入佛知見^一。能持我身空、所持法空、能出我身空、

所出音聲空、能化我身空、所化有情空。無能無所、無內無外、無說無聽、畢竟空寂猶如「虛空」。雖「無」能持・所持・、依法・正法宛然。雖「無」能出・所出・、成「音聲佛事」。雖「無」能化・所化・、蒙「益」無量。即「有無」、即「無有」。非「無非」有亦無。三諦非三非一。願以「如幻如化身」、誦「如幻如化經」、化「如幻如化有情」、出「如幻如化生死」、證「如幻如化菩提」、開「如玄如化經」矣。

〔五部血脈〕〔傳教大師全集五・三六三〕
持經者の舌の上にあるのは蓮華ではなく阿字であること、また佛に變じる文字が經卷の文字であることを除けば、『五部血脈』の傍線部は（オ）とほぼ一致する。

『孝養集』に『往生拾因』からの引用があることと、『往生拾因』第九因に『心性罪福因緣集』卷中第六話が引用されていることを勘案すると、本話が『法華經讀誦觀』のいずれかを『孝養集』は参照したと推測できる。對比表に示したように、内容が對應している箇所（A～F、H）は等しく本話や『法華經讀誦觀』にみられる点と、『孝養集』と『法華經讀誦觀』が同じく『法華經』讀誦に特化している点、本話より『法華經讀誦觀』の表現が洗練されている傾向がある点を考え合わせると、三者の成立順序は、本話↓『法華經讀誦觀』

『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』（崔）

↓『孝養集』であり、『孝養集』は直接に『法華經讀誦觀』を参照したのではないだろうか。

さらに注目すべきは、『孝養集』が『法華經讀誦觀』と『五部血脈』を同時に参照していることである。

五、本文の傳寫狀況

③において、大きな相違は一箇所のみである。左に示したように、Gの「有觀誦」に對する説明に關して、本話は『法華經讀誦觀』と比べて分量が倍になっている。

我身經卷、讀誦音聲、聽聞大小、由「業不」失、自然而住、是故萬法、雖「空」而有。

我身經卷、讀誦音聲、聽聞大小、由「業不」失、自然而住、是故萬教、雖「空」而有。

（『心性罪福因緣集』）

我身經卷、讀誦音聲、聽聞大小、由「業不」失、自然而住、是故萬法空而有。

（『法華經讀誦觀』）

これは恐らく『法華經讀誦觀』を含む『菩提鈔』全體の書寫態度に起因するもので、目移りによる脱文があつたのではないかと思われる。他の『菩提鈔』所收文獻には、目移りに

よる脱文と思しき箇所が確認できるからである。『菩提鈔』という書名の由來は未詳であるが、目次は左の通りである(一)内は舜興の注。

一生死覺要鈔「妙樂大師作／偽」

一法華讀誦觀「惠心御作／偽ニして殊勝ナルモノ」

一本覺心要和讃「慈惠大師述」

一觀心往生論「慈覺大師撰／二部俱偽」

一自行略記「都率僧都 亦惠心御作／眞偽不辯殊勝ナモノ」

一天台智者心祕要決「偽作也」

一千觀内供八ヶ條起請

一南岳大師御詞云「偽作」

一法華讀誦用心鈔「惠心院僧都源信御作／不眞偽殊勝ナルモノ」

例えば、『本覺心要和讃』には「二期縱横苟、己離本爲」とあるが、「己」「離」の間に脱文が確認できる。『日本思想大系9 天台本覺論』所収の『註本覺讃』の該當箇所は、「二期ノ縱横イヤシクモ、己心中ニ納メタリ。我身ハ薄福底下ニテ、浮囊破レテ海フカシ。佛乗緣ラムスバズバ、何ヲ出離ノ本トセン」とあり、傍線部の内容が缺けている。また、

『觀心往生論』に「唯觀己心、以期聖念惡」とあるが、『惠心僧都全集』第三卷所収の一本によると、「聖」「念」の間に「應。竊以、地獄界、我心所具也。故無始已來、造諸惡業、受大苦惱。依一」が缺如している。

このように、江戸時代に書寫された『菩提鈔』において、『法華讀誦觀』は天台本覺思想文獻と並べて收録されている。このような享受のあり方は、恐らく『孝養集』が成立する平安後期からすであつたと考えられる。第四節で確認したように、『孝養集』が『法華經讀誦觀』と『五部血脈』を同時に参照していたことは、その可能性を示す一つの根據となる。

六、『法華經』との關連

⑤は本話にみえず、『法華經讀誦觀』にしか確認できない箇所である。本話において『法華經』讀誦を示す明確な表現などが確認できないのに對して、⑤の冒頭に「一大事因緣」と掲げているところから、『法華經』と結び付けて議論を展開していることが解かる。この點は、第四節で確認した②の相違箇所に通ずる。

舍利弗、諸佛隨宜說法、意趣難解。所以者何。我以三無

數方便種種因緣譬喻言辭^一演說諸法^二。是法非^三思量分別之所^四能解^一。唯有^二諸佛^三乃能知^四之^一。所以者何。諸佛世尊、唯以^二一、大事、因緣^三、故出^四現於世^一。舍利弗、云何名^二諸佛世尊唯以^三一、大事、因緣^四、故出^五現於世^一。諸佛世尊、欲^二令^三衆生開^四佛知見^一、使^レ得^中清淨上^レ、故出^二現於世^一。欲^レ示^三衆生佛之知見^一、故出^二現於世^一。欲^レ令^三衆生悟^四佛知見^一、故出^二現於世^一。欲^レ令^三衆生入^四佛知見道^一、故出^二現於世^一。舍利弗、是爲諸佛以^二一、大事、因緣^三、故出^四現於世^一。

〔法華經〕方便品「大正九・七上」

しかし、結末に「抑經初文何如」とあり、結びの文言として見ることができず、『法華經讀誦觀』は未完成あるいは途中で切られている可能性がうかがえる。あるいは何か別の文獻からの抄出とも考えられる。それはともかく、『心性罪福因緣集』の本話に説く大乘經典讀誦法は、平安後期において『法華經』の讀誦法として受容されていたと言えよう。

七、おわりに

小稿では、本話と同じ内容を有する、源信假託『法華經讀誦觀』について、兩者の異同を分析した。經典讀誦の作法、とりわけ「事讀誦」の作法においては、『觀普賢菩薩行法經』

『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』（崔）

『續高僧傳』に類似表現が確認できるが、それを事理具足の讀誦に比定する『止觀輔行傳弘決』の記述は、『法華經』讀誦を事と理に分けて説明する早い事例である。本話は、『止觀輔行傳弘決』の當該箇所にもとづいてきたのではないだろうか。

また、傳覺鑒『孝養集』卷中第十二「可讀法華經事」を照らし合わせながら、本話と『法華經讀誦觀』と『孝養集』の三つの成立順序を確認することができた。『大日本國法華經驗記』と共通する語彙を有することから判斷すると、『心性罪福因緣集』の本話が最も古く十一世紀半ばの成立であり、『法華經讀誦觀』の表現がより洗練しているところから本話に次ぐものであり、『孝養集』が最も新しく十二世紀までの成立と考えられる。

さらに、『孝養集』が『法華經讀誦觀』と『五部血脈』を同時に参照していることからすると、江戸時代に『菩提鈔』として合冊された『法華經讀誦觀』と『生死覺要鈔』が同時に參看可能になったのは、遅くとも『孝養集』の成立した十二世紀頃まで遡ることができよう。『心性罪福因緣集』の中の一話がどのように『法華經』の讀誦を説く單獨作品として成立したのか、その過程についてさらに追及する餘地がある

が、それが天台本覺思想文獻と共に享受されていたことは重要な意義を持つ。すなわち、『心性罪福因緣集』の成立環境が天台本覺思想文獻の成立環境と重なる部分があり、『心性罪福因緣集』に對する研究は、天台本覺思想文獻の成立時期を追求するための一助となり得るからである。『心性罪福因緣集』は攝關期末ごろの成立であり、『法華經讀誦觀』は院政期に成立していた可能性が高い。これによって、天台本覺思想文獻の成立は遅くとも攝關期末ごろまで遡れることを裏付けることができた。

『使用テキスト』主に以下に依據しつつ、適宜、句讀點等を私に改めた。

『法華經』『觀普賢菩薩行法經』『摩訶止觀』『法華文句』『續高僧傳』『止觀輔行傳弘決』『大正新脩大藏經』『心性罪福因緣集』『元祿十三年版本（『中世禪籍叢刊』第十二卷所收龍谷大學圖書館藏本）』『五部血脈』『傳教大師全集』『法華經讀誦觀』『菩提鈔』（西教寺正教藏九合本。國文學研究資料館マイクロフィルム「三二・二六八・八・C」にて閲覽。訓點は『惠心僧都全集』第三卷所收翻刻參照）。『註本覺讚』『日本思想大系』『觀心往生論』『惠心僧都全集』『孝養集』『續淨土宗全書』『三國傳記』『中世の文學』

【註】

(1)

『心性罪福因緣集』が日本撰述であることについては、大久保良峻「現實肯定思想—本覺思想と台密教學—」（日本佛教研究會編『日本の佛教1 佛教史を見なおす』、法藏館、一九九四・一〇↓『天台教學と本覺思想』、法藏館、一九九八・一初版↓二〇二二・一増訂版）、吉原浩人「院政期における〈本覺讚〉の受容をめぐる—「心性罪福因緣集」と大江匡房の文業を中心に—」（菅原信海編『神佛習合思想の展開』、汲古書院、一九九六・二）、同「『心性罪福因緣集』解題」（阿部泰郎・末本文美士編『中世禪籍叢刊』第十二卷「稀觀禪籍集續」、臨川書店、二〇一八・三）など參照。

(2)

『往生拾因』『今昔物語集』における『心性罪福因緣集』の受容については、大谷旭雄「心性罪福因緣集と永觀の密教的名號觀—特に第七念佛項の影響から—」（『佛教論叢』第一一號、一九六六・一二↓『法然淨土教とその周縁』乾、山喜房佛書林、二〇〇七・七）、同「心性罪福因緣集とその影響—とくに『往生拾因』と『今昔物語』—」（『印度學佛教學研究』第一八卷二號、一九七〇・三↓『法然淨土教とその周縁』乾、山喜房佛書林、二〇〇七・七）、清水宥聖「心性罪福因緣集の説話—『今昔物語集』『寶物集』『雜誌集』とのかわり—」（『群女國文』第七號、一九七八・六）、今野達「心性罪福因緣集と説話文學—今昔卷四の第九・十話の原據など—」（『文學』第五五卷一號、一九八七・一↓『今野達説話文

學論集』、勉誠出版、二〇〇八・三）、吉原浩人「院政期宗教思想史の側面―『續本朝往生傳』惡人往生譚形成の背景―」（『國文學 解釋と鑑賞』第六〇卷一〇號、一九九五・一〇）、八木徳俊「『心性罪福因緣集』における『念佛』（『佛教論叢』第六六號、二〇二二・三）など参照。なお、『心性罪福因緣集』卷中第六話「明恵沙門」は、『往生拾因』第九因において沙門明智の話として引かれるが、『三國傳記』卷一第二十話「胡國山中四人僧修行不同事」において震旦の明智比丘の話として採録されている。

- (3) 『法華經讀誦觀』を源信の眞撰として、これを用いて源信における讀經の思想を論じた研究に、清水眞澄「能讀の經讀み傳承―音藝「讀經」について―」（天野文雄・須田悅生・渡邊昭五編『藝能傳承の世界』、講座日本の傳承文學第六卷、三彌井書店、一九九九・三）、「音聲表現思想史の基礎的研究―信仰・學問・支配構造の連關―」（三彌井書店、二〇〇七・一二）がある。

- (4) 舜興と西教寺正教藏については、伊藤正義「文獻調査とその資料性―西教寺・正教藏本をめぐる―」（『國文學研究資料館講演集』第一四號、一九九三・三）、宇都宮啓吾「西教寺正教藏の訓點資料について」（『小林芳規博士喜壽記念國語學論集』、汲古書院、二〇〇六・三）など参照。

- (5) 筆者は大學院在學中から吉原浩人教授のもとで『心性罪福因緣集』の譯註作業に携わり、本話もその成果の一部である。『心性罪福因緣集』卷中第十三話と傳源信『法華經讀誦觀』（崔

る。譯注の分擔は以下の通り。①・崔鵬偉、②・田中美美、③・八木徳俊、④・櫻本香織。本書の詳細な譯注は、近い將來公刊する豫定である。

- (6) 類話は、『集神州三寶感通錄』卷下（大正五二・四二七下）・『大唐內典錄』卷十歷代衆經感應興敬錄（大正五五・三三九下）・『法苑珠林』卷十八敬法篇感應緣（大正五三・四二一上）・『法苑珠林』卷六十四慈悲篇感應緣（大正五三・七七九中）など。

- (7) 肥田路美編『美術史料として讀む『集神州三寶感通錄』―釋讀と研究―（十三）』（早稻田大學大學院東洋美術史、二〇二一・三）九三―九四頁、注¹³⁵「別衣・別座」参照。

- (8) 出典は、『集神州三寶感通錄』卷下（大正五二・四二七下）。詳細な譯注は肥田路美編『美術史料として讀む『集神州三寶感通錄』―釋讀と研究―（十四）』（早稻田大學大學院東洋美術史、二〇二三年三月發行豫定）参照。類話は、『大唐內典錄』卷十歷代衆經感應興敬錄（大正五五・三三九中下）・『法苑珠林』卷十八敬法篇感應緣（大正五三・四一九下）四二〇上）・『法華傳記』卷五諷誦勝利第八之三「隋岐州東山下村沙彌八」（大正五一・六八上）・『釋門自鏡錄』卷下（大正五一・八二三下）など。

- (9) 對應する『摩訶止觀』卷二下には、「次歷三精進善。舊云、精進無別體。但篤衆行。義而推之應有別體。例無明通入衆使、更別有無明」。今且寄誦經勤策其心

「以擬『精進』。晝夜不_レ虧、乃得_二滑利_一。而非_二三昧慧_一」(大正四六・一七上)とある。「舊云、精進無別體但篤衆行」は、池田魯參氏によると、『大智度論』卷八十一「菩薩初用_二精進門_一入_二諸波羅蜜中_一、勤_二行五波羅蜜_一、身心精進、不_レ休不_レ息。精進更無_二異體_一。住_二是精進中_一、不_レ畏_二阿鼻泥梨苦_一、何況餘苦」(大正二五・六二九中)を指すという(池田魯參『詳解摩訶止觀 地卷(研究註釋篇)』、大藏出版、一九九七・六、二八四頁)。また、威儀を整えてから別座にして誦經を始めることや、誦經がそのまま六波羅蜜であると説く内容は、智顗の講説とされる『觀心誦經法』に確認できる(湛然の注記を持つ『觀心誦經法記』が『大日本續藏經』第二編第四套第一冊に收録)。「觀心誦經法」に關しては、佐藤哲英『天台大師の研究—智顗の著作に關する基礎的研究—』第二篇第九章「禪門口訣そのたの著作」(百華苑、一九六一・三)、大野榮人「天台『觀心誦經法』の研究」(『愛知學院大學論叢 文學部紀要』第一三號、一九八四・三)、『天台止觀成立史の研究』第三章第三節「觀心誦經法」の考證、法藏館、一九九四・七)参照。

(10) 大野榮人氏は註(9)前掲論文において、「誦經觀法」というのは「觀心誦經法」を指しているとする。また智顗の著述における誦經のとらえ方を體系的に論じた研究に、大野榮人「天台智顗の誦經觀」(『印度學佛教學研究』第三二卷一號、一九八三・一二)、『天台止觀成立史の研究』第二章第四節

「智顗における誦經法の形成」、法藏館、一九九四・七)がある。

(11) 『摩訶止觀』卷五上には、「夫一心具_二十法界_一。一法界又具_二十法界_一。百法界。一界具_二三十種世間_一。百法界即具_二三千種世間_一。此三千在_二一念心_一」(大正四六・五四上)とある。

(12) 『孝養集』については、松崎惠水『孝養集』について「『密教學研究』第二〇號、一九八八・三」、『平安密教の研究 興教大師覺鑒を中心として』第五章「興教大師覺鑒の撰述について」、吉川弘文館、二〇〇二・三)、伊原照蓮「運敵僧正と孝養集」(『興教大師覺鑒研究』、春秋社、一九九二・一二)、齊藤雅恵「孝養集」と良忠撰「看病用心鈔」について—臨終行儀をめぐる—(『智山學報』第五六輯、二〇〇七・三)、苦米地誠「『孝養集』の六道説—六道繪制作の思想背景をめぐる—」(『智山學報』第五六輯、二〇〇七・三)など参照。

(13) 『五部血脈』は、「一念成佛義」「生死覺用鈔」「法華經大意」「理觀讀誦」「法華題目」の五つからなる。内容的には、傳最澄『天台法華宗牛頭法門要纂』や、金澤文庫藏「本無生死偈」や、身延山藏「北谷祕典」と共通する部分がある。多田厚隆・大久保良順・田村芳朗・淺井圓道校注『日本思想大系9 天台本覺論』解説(岩波書店、一九七三・一)、山内舜雄「天台法華宗牛頭法門要纂」(傳最澄)における本覺思想の考察」(『駒澤大學佛教學部論集』第一四號、一九八三・

一〇）、大久保良順「天台法華宗牛頭法門要纂」の牛頭法門について」（『天台學報』第三五號、一九九三・一〇）など参照。

(14) 『生死覺要鈔』は『五部血脈』『生死覺用鈔』や『天台法華宗牛頭法門要纂』第五「三惑頓斷」と、『天台智者心祕要決』は『天台法華宗牛頭法門要纂』第一「鏡像圓融」と、内容的に一致する。

【附記】 本稿は、二〇二二年六月一日、早稻田大學東洋哲學會第三十九回大會における口頭發表を基に成稿したものである。

〈キーワード〉 心性罪福因緣集、法華經讀誦觀、菩提鈔、孝養集、本覺思想

【對比表】 ※A、Hのうち、Gを除いて、すべて『孝養集』と内容的に類似する箇所を示す。

①	『心性罪福因緣集』卷中第十三話（元祿十三年版本）
明智和尚、問_二比丘_一言、沙門行法、何爲_レ宗。比丘答云、我常日日讀_二誦經典_一、其數百卷、更不_二退轉_一。和尚問云、以_二何心行_一、讀_二誦經典_一。比丘云、我性聰明、讀_二誦經典_一、自然誦誦。見_二諸法師_一、皆讀_二誦經_一、我今法師、是故讀誦。細不_レ知_二尋_一讀誦因緣。明智和尚、語_二比丘_一云、希有難_レ遇大乘經典、汝今讀誦、甚爲_二難事_一。但所_二歎念_一、不_レ知_二讀誦心行作法_一。我今爲_レ汝、示_二讀誦法_一。我是胡國大臣子也。厭_レ世出家、而捨_レ樂求法。初發心之時、雖_レ讀_二誦經_一、未_レ知_二觀法_一。胡國之北山有_二一比丘_一。我往_二于彼山_一、經行讀誦。時彼比丘、身心沐浴、而著_二新淨衣_一、脫_二汚垢衣_一。於_二經卷前_一、燒香散華、而拜_レ經數百千反。然後端_レ身、安_二座於法座_一、而手塗_二名香_一、敬_レ屈取_レ經、頭上舉開、讀誦思惟。不_レ高_二音聲_一、又不_二早讀_一。終日誦經、纔終_二一卷_一、或讀_二半卷_一。讀了而置_レ經、閉_レ眼思惟、從_二法座_一起、如_レ前禮_レ經、數百千返。悲泣渴	『法華經讀誦觀』（九合本） 甚爲_二難事_一。 抑希有難_レ遇大乘經典、汝今讀誦、 爲_レ汝、示_二讀誦法_一。 我 身沐浴、着_二新淨衣_一、脫_二奇垢衣_一。於_二經卷前_一、燒香散華禮拜。 然後端_レ身、安_二座於法座_一、手塗_二名香_一、敬_レ屈取_レ經、頭上舉開、讀誦思惟。不_レ高_二音聲_一、又不_二早讀_一。 誦畢置_レ經、閉_レ眼思惟、從_二法座_一起、如_レ前 悲泣渴

仰、還居^レ住所^一。脫^二讀經衣^一、著^二常途衣^一。如^レ是如是、日日不^レ退。我見^二如是讀經作法^一、欲^レ知^二因緣^一、問^二彼比丘^一。比丘答言、汝新發僧也、是故不^レ知^二因緣^一。我當^二爲說^一。凡於^二讀誦^一、有^二二種之法^一、一者文字誦、二者理觀誦。

仰、還居^レ住處^一。脫^二讀誦衣^一、著^二常途衣^一。如^レ是如是、日日不^レ退。

凡於^二讀誦^一、有^二二種法^一、一

②

文字誦者、若欲^二誦經^一、應^レ淨^二三業^一。所以者何。穢手取^レ經、臭口向^レ經、後世生^二於廁中糞蟲^一、或墮^二地獄^一、折^二破手^一、口飲^二融銅^一。是故必淨^二身及手口^一。汝深應^レ知、經是三世諸佛之父母、諸佛之所^レ師、所謂大乘也。可^レ知、法身如來者、全身之舍利。經卷住所、諸佛集會、龍神圍繞。是故讀者必須^二用意、威儀具足^一。手口清淨、而名香塗^レ手。沉檀含^二口中^一、口氣皆令^二消去^一。生^二難遇想^一、心念口言、我今念^二生死之過^一、僧祇劫墮^二三惡道^一、從^レ冥入^レ冥、增^二諸苦業^一。猶不^レ得^レ聞^二天地・日月・父母之名^一、亦不^レ得^レ聞^二五戒・十善・人天教之名^一。況得^レ聞^二如^一是大乘實相之法門^一。佛出^レ世難、佛說是難、聞^レ名亦難、讀^レ持之人難。大覺世尊、希有出現、難^レ思方便、說^二置大乘^一。希有。我等

文字誦者、若欲^二誦經^一、應^レ淨^二三業^一。所以者何。穢手取^レ經、□口向^レ經、後世生^二於廁糞蟲^一、或墮^二地獄^一、折^二破身手^一、口飲^二融銅^一。是故必淨^二身及手口^一。汝除應^レ知、經是三世諸佛父母、諸佛所^レ師、所謂大乘也。又是可^レ知、法身如來、全身舍利。經卷住所、諸佛集會、天龍圍繞。是故讀者必須^二用意、威儀具足^一。手口清淨、名香塗^レ手。沉檀含^二口、手垢口氣、皆令^二消去^一。生^二難遭想^一、心念口言、我念^二生死、過^二阿僧祇劫、墮^二三惡道^一、從^レ冥入^レ冥、增^二諸苦業^一。猶不^レ得^レ聞^二天地・日月・父母之名^一、亦不^レ得^レ聞^二五戒・十戒・人天教名^一。何□□□聞。如^レ是大乘實相法門^一。佛出^レ世難、佛說是難、聞^レ名亦難。□□□人難、大覺世尊、希有世現、難思方便、說置希有。我等

値_レ如_レ是之法_一、猶如_三盲龜之值_二浮木孔_一、如_三貧窮之得_二如意珠_一。如_レ是戀慕、不_レ生餘心_一。又更懺悔三業所犯_一、又發_三弘誓_二具_一慈悲心、香華・飲食・幡蓋・供具、隨_二力所_レ堪、供_二養經卷_一。臨_二讀誦_一時、五體投_レ地、禮_二拜經卷_一。坐_三於法坐_一、應_レ時思惟。雖_二凡夫身_一、今讀_二大乘_一、欲_レ聞經故、龍神八部皆來集會、諸佛菩薩滿_レ空證明。是故我今心純淨信、應_レ讀誦經_一。如_レ是思惟讀經之間、能尋_二文句_一、更不_二雜亂_一。亦不_レ讀_二落一文一字_一。初中後時、平等生_レ信、復不_二退轉_一。如_レ是讀誦、名_二事讀誦_一。

③ 觀心讀誦、其義甚深。破_二心微塵_一、出_二大千經_一。故知、經卷但在_二我心_一、以_二我身體_一直名_二經卷_一。骨髓如_レ軸、皮肉如_レ紙、血色如_レ墨。五臟・六腑・肝等之類、無量差別重重不_レ雜、如_三經文字_一、其數無量互不_二雜亂_一。心王住_レ中、其性玄妙。豈非_二經中所_レ詮實相_一乎。佛說_二衆生心性善惡不思議之理_一、名爲_二經卷_一。是故應_レ知、誰云_二經卷_一、誰云_二衆生_一、名異體同、如_二眼目異

□如_レ是法_一、猶如_三盲龜值_二浮木孔_一、亦如_三貧窮之得_二如意珠_一。如_レ是戀慕、不_レ生餘心_一。又更懺悔三業所犯_一、又發_三弘誓_二具_一慈悲心、香華・飲食・幡蓋・供具、隨_二力所_レ堪、供_二養經卷_一。臨_二□□時_一、五體投_レ地、禮_二拜經卷_一。坐_三法座_一、應_レ時思惟。雖_二凡夫身_一、今讀_二大乘_一、聞_レ經故、龍神八部皆來集會、諸佛菩薩滿_レ空證明。是故我今心能淨信、應_レ讀誦經_一。如_レ是思惟讀誦之間、能尋_二文句_一、更不_二雜亂_一。亦不_レ讀_二落一文一字_一。初中後時、平等生_レ信、復不_二退轉_一。如_レ是讀誦、名_二事讀誦_一。破_二一念無明_一、出_二三千諸法實相理_一、云_レ事也。

觀心讀誦、其義深。破_二心微塵_一、出_二大千經_一。故知、經卷但在_二我心_一、以_二我身體_一直名_二經卷_一。骨髓如_レ軸、皮肉如_レ紙、血色如_レ墨。五臟・六腑・肝等類、無量差別重重不_レ雜、如_三經文字教無量_一、互不_二雜亂_一。心王住_レ中、其性玄妙。豈非_二經中所_レ詮實相_一乎。佛說_二衆生心性善惡不思議之理_一、名爲_二經卷_一。是故應_レ知、雖云_二經卷_一、雖云_二衆生_一、名異體同、如_二眼目異

一。是故我身卽是經卷、我心卽是所詮實相。如是觀知、是真經卷、如是思惟、是真讀誦。爲令衆生知二心經卷、方便說教、名爲經卷。又須觀能誦我身所誦經卷、如幻化實不可得上。誰人讀誦、誰人聽經。猶如夢中化人出音、又如山谷依音發響。是故萬法自性皆空。如是讀誦、名空觀誦。雖空而有。我身經卷、讀誦音聲、聽聞大小、由業不失、自然而住。是故萬法雖空而有。我身經卷、讀誦音聲、聽聞大小、由業不失、自然而住。是故萬法雖空而有。

一。是故我身卽是經卷、我心卽所詮實相也。如是觀知二心經卷、如是思惟、是真讀誦。爲令衆生知二心經卷、方便說教、名爲經卷。又須觀能誦我身所誦經卷、如影如化、實不可得上。誰人讀經、誰人聽經。猶如夢中化人出音、又如山谷依音發響。是故萬法自性皆空。如是讀誦、名空觀誦。雖空而有。我身經卷、讀誦音聲、聽聞大小、由業不失、自然而住。是故萬法空而有。

如思惟、名有觀誦經卷。我身及一切法、非有非無、亦有亦無、非識所知、非言所詮、無始法爾寂靜宛然。是故須臾讀經之心、生界佛果自然具足、六度萬行法爾而有。如是讀誦大乘經典、名爲觀心中道讀經。住如是觀、名理讀誦。

如是思惟、名有觀誦。我有及一切法、非有非無、亦有亦無、非識所知、非言所詮、無始法爾寂靜宛然。是故須臾讀誦之心、生界佛界自然具足、六度萬行法爾而有。如是讀誦大乘經典、名爲觀心中道讀誦經。住如是觀、名理讀誦。

只調三業、誦文字經、功德無邊。何況觀心相應讀誦、所得功德、不知邊際。唯有如來、知功德量、凡智思量、所不能及。如是讀者、皆應供養禮拜讚歎。以前二種、名讀經之法。汝深聽

只調三業、誦文字經、功德無邊。何況觀心相應讀誦、所得功德、不知邊際。唯如來、知功德量、凡智思量、所不能及。如是讀者、皆應供養禮拜讚歎。

④

受、可_レ納_レ心藏_一、無_レ令_二滿失_一焉。比丘語畢、入_レ夜誦經。從_二口中_一出_二五色之光明_一、滿_二耀房內_一。我見_二此相_一、彌生_二信敬_一、更無_二疑惑_一。從_レ其以後、纔讀經時、依_二彼方法_一誦。比丘僧依_二此方法_一、應_下誦_二大乘_一、現身成_中就萬德佛身_上。經_二歷多劫_一、雖_レ誦_二大乘_一、不_レ依_二觀心_一、不_レ如_レ法誦、恐成_二遠因_一、總無_二大益_一。如人有_レ病、得_二大良藥_一、不_レ知_二和合_一、亦不_レ了_二知眼藥方法_一。但喜獲_二得微妙良藥_一、任_レ意服_レ之、不_レ知_レ治。時良藥變_レ毒、病惱更增。或同_二死苦_一、或復致_レ死。雖復纔存、良藥盡_レ力。是故比丘能知_二方法_一、服_二大乘藥_一、治_二煩惱病_一、增_二三身命_一。比丘聞已、五體投_レ地、迷悶絕息。以_レ水灑_レ面、而得反活。苦哉悲哉、惡業之身、于_レ今不_レ知_二如是深法_一、我今法味始得_レ嘗_レ食_一。自_レ今以後、如_レ是受持。又復和尚更誡_二沙門_一、是此密事、勿_レ傳_二非器_一。末世衆生、善根微薄。如_レ是觀心、更不_レ信_レ受_一、反生_二誹謗_一。以_二一滴水_一、灑_二萬里沙_一、更不_レ可_レ濕。況有_二末世五濁衆生_一。如_レ是如_レ是、是故比丘_二一心聽受_一、淡泊莫_レ傳、任_レ意不_レ顯。是故應_レ知、心・佛・衆生_三無_二差別_一。應_レ觀、法性眞

依_二此方法_一、應_下讀_二大乘_一、現身成_中就萬德佛身_上。經_二歷多劫_一、雖_レ誦_二大乘_一、不_レ依_二觀心_一、不_レ如_レ法誦、恐成_二遠因_一、忽無_二大益_一。

是故比丘能知_レ法、服_二大乘藥_一、治_二煩惱病_一、增_二三身命_一。

苦哉悲

哉、惡業身、于_レ今不_レ知_二如是深法_一、我今法味始得_レ掌_レ食_一。自_レ今已後、如_レ是受持。

此是蜜事、勿_レ傳_二非器_一。末世衆、根微薄。

如_レ是觀心、不_レ信_レ受_一、反生_二誹謗_一。以_二一滴水_一、灑_二萬里沙_一、□不_レ可_レ濕。况有_二浮石_一。五濁衆生、如_レ是如_レ是。

	⑤
如寂靜、諸法心起不思議故。	
	後一大事因緣、是名「妙法」。則一切衆生令「開示悟入佛之知見」。凡萬法非「有非無」、中道第一義諦、名「之爲」。萬法無「名無相」、第一義空、名「之爲」大。萬法眞善妙有、如來祕藏、名「之爲」事。生佛感應、名「之爲」來緣。百界千如、三千世間、重重無盡不「辨」數。知「見凡聖因果」、依正法門、一一皆悉三諦一諦。一諦三諦、非「三非一」、不縱不橫、不一不異。言語道斷、心行所滅。從「四德寂光之本地」、垂「三土隨情之應迹」。哀「十方衆生」、施「四門利益」、是爲「本懷」。以「讀誦演善根」、偏爲「無盡法界三寶境界」。法樂莊嚴、□令「遂」佛子臨終正念、往生極樂、證大菩提索懷。仰願久遠實成如來、伏乞發誓弘經大士、知「見弟子丹誠」、成「就二世大願」。普使「三法界衆生平等垂利益」。抑經初文如何。